



Data

監督・製作：ゴードン・チャン
 脚本：マリア・ウォン／フランキー・タム／ウー・マンチャン
 出演：チウ・マンチェク／サモ・ハン・キンポー／ワン・チェン／倉田保昭／小出恵介

👁️👁️ みどころ

映画は歴史の勉強に最適！「抗清復明」と「台湾解放」に命を捧げた中国の三大英雄の一人である鄭成功を、私は『国姓爺合戦』（01年）ではじめて知ったが、本作ではじめて明の将軍、戚継光を知ること。

また、倭寇という言葉は知っていても、前期倭寇と後期倭寇の違いをはじめ、その歴史的役割を私たちは正確には知らない。しかして、戚継光は中国本土から後期倭寇を追っ払うために如何なる役割を・・・？

他方、日本人のアクション俳優、倉田保昭は有名だが、彼は本作ではどんな役割を？ウィキペディアで一つ一つ歴史上の事実を確認しながら鑑賞すれば、さらに興味は増すはずだ。「未体験ゾーンの映画たち 2018」で、こんな隠れたエンタメ大作を鑑賞できたことに感謝！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「未体験ゾーンの映画たち 2018」で貴重な本作を発見！■□■

「未体験ゾーンの映画たち」は「様々な理由から劇場公開が見送られてしまう傑作・怪作映画を、映画ファンの皆様にスクリーンで体験いただくべく、ヒューマントラストシネマ渋谷をメイン会場に2012年より開催」しているもの。私は過去にもそこでいくつかのいい作品を発見したが、第7回目となる2018年も、貴重な本作を発見！また、今から16年前の2002年には、わざわざシネ・リーブル梅田まで『国姓爺合戦』（01年）を観に行き大感激したことを、私は今でもはっきり覚えている（『シネマルーム5』155頁参照）。その鑑賞によって、私は鄭成功の名前とその歴史上の役割をしっかりと勉強したが、さて本作は？そして、本作の主人公となる明の将軍、戚継光とは？

『ゴッド・オブ・ウォー』とは何とも大層なタイトルだが、チラシを見ると、それは「倭

寇2万人VS明軍わずか3千人」の「命をかけた正義の戦い！」らしい。主役の戚継光を演じるチウ・マンチェクの名前に私は見覚えがなかったが、サモ・ハン・キンポーと倉田保昭の名前は私もハッキリ知っている。製作陣も俳優陣も完全に日・中・香港の合同チームだ。

中国でも有名な日本人のアクション俳優、倉田保昭を、私はたまたま前日の3月17日(土)に大阪アジア映画祭で上映した『空手道』(17年)で鑑賞したばかり。2日続けて俳優、倉田保昭を見るのも何かの因縁だ。『空手道』では空手の型ばかりの演技だったが、本作で倭寇の大將役を演じた倉田は、クライマックスでは日本刀とカンフーで明の將軍・戚継光(チウ・マンチェク)と息詰まる個人対決を見せてくれるので、それに注目!

■□■鄭成功も有名だが戚継光も有名! 導入部での活躍は? ■□■

「抗清復明」、「台湾解放」に命を捧げた鄭成功(ていせいこう)は、今も中国の三大英雄の一人として有名だが、明の將軍である戚継光(せきけいこう)は、倭寇及びモンゴルと戦ってともに戦果をあげたことから有名。字は元敬で、竜行剣という剣法の開祖とも伝えられている。ウィキペディアによれば、彼の略歴は次のとおりだ。

登州衛(山東省蓬萊県)の出身。中国沿岸を中心に密貿易を行っていた倭寇(後期倭寇と呼ばれる)の討伐に従事する。浙江省金華・義烏で兵を集め、「戚家軍」と呼ばれる自身の精兵、水軍を組織する。胡宗憲の指揮下で俞大猷、劉顕らとともに倭寇を討伐する(但し、当時の後期倭寇は多数の中国人の構成員を日本人の幹部や首領が束ねていた今日と言う多国籍犯罪組織に近い性格のものが中心である)。

1567年に海禁令が解かれて倭寇の活動が沈静化すると北方防備に従事し、アルタン・ハンの侵入に対応する。大規模な万里の長城の補強・増築工事に取り組んだ。

こうした武歴から内閣大学士で当時大きな権力を持っていた張居正に重用されるようになったが、張の死後、戚の功績を妬む者から弾劾され、免職された。その処置は3年後に撤回されるものの、まもなく失意のうちに世を去った。

本作は、倭寇の大將(倉田保昭)が武士と荒くれ浪人の連合軍を率いて守る砦を、明の將軍・俞大猷(サモ・ハン・キンポー)が攻めるシーンから始まるが、そこで俞大猷は連合軍に大敗。その責任を取らされた俞大猷は退き、その代わりとして戚継光が山東から浙江に赴任してくることに。知力に長け人望も厚い戚継光は巧みな策略で砦を撃破するから、本作導入部ではまずそんな合戦シーンを楽しみたい。もっとも、その導入部では倭寇側も余裕綽々での退却だから、その巻き返しは如何に・・・?

■□■戚継光は恐妻家? ■□■

日本の戦国武将でも、中国の宋、明、清の時代の將軍でも、恐妻家はあまり見たことがないが、戚継光は少しそんな気があったらしい。マッサージのシーンやベッドシーン(?)

に見る戚継光の妻はすごい美人だが、後半からクライマックスにかけてはそれが一変し、木曾義仲の夫人であった巴御前のように武芸で大活躍するので、それに注目！

ちなみに、ウィキペディアによれば、戚継光の人物については次のように解説されているので、それにも注目！

歴戦の勇将ながら大変な恐妻家であったとされ、軍律に背いた息子を処刑したことに怒った夫人から生涯妾を持たない事を誓わされた。その後誓いを破り2人の妾と密通し、それぞれ隠し子を1人ずつもうけたが夫人に露見してしまう。激怒した夫人から妾と子供を殺すよう迫られた戚継光は、1日だけ猶予をもらい部下であった夫人の弟を呼びだし「妾たちを許し、子供を養子として引き取るよう明日までに姉を説得しろ。さもなくば、お前もお前の姉も、お前一族も全員殺したうえ自分は官職を辞し世捨て人になる」と脅した。弟は泣きながら夫人を説得したため、夫人は仕方なく隠し子を引き取り、母親である妾2人には杖罰五十を加え追放するに止めた。これを聞いた世間の人々は、戚継光の深謀を称えと共に、彼の恐妻家を笑った。なお、数年後に夫人が病死すると妾たちを家に呼び寄せ、子供達と一緒に生活させている。

■□■新兵の訓練は？新たな戦法は？■□■

デミ・ムーアが主演した『G. I. ジェーン』（97年）では、米国海兵隊の荒くれ訓練ぶりが強調されていたが、本作中盤では、倭寇に対抗するため、義島の民衆を新たに強力な新兵として育て上げようとする戚継光の訓練ぶりに注目。その訓練シーンは、ホントに米国海兵隊の訓練風景にそっくり！？

他方、織田信長の下で頭角を現した木下藤吉郎は、新たな戦法として長槍部隊を提案し、信長の目の前でその威力を見せつけたから、彼のアイディア力は大了なもの。それと同じように、本作では戚継光が新たに工夫したとされる「鴛鴦陣」が登場し、その戦闘シーンが展開されるので、それに注目！ウィキペディアによれば、それは次のとおりだ。

倭寇の持つ鋭い日本刀対策として、狼筈という枝葉の付いた竹製の槍を開発し、それを装備した兵を含む「鴛鴦陣」と呼ばれる10人の分隊による集団戦法を編み出した。この戦法により倭寇戦では多大な戦果を挙げた。

また、戚継光は兵法にも長け、かつ個人としての格闘能力にも長けていたそうだから、本作はその面でも見どころがいっぱい。その点についてのウィキペディアの解説は次のとおりだ。

『紀效新書』『鍊兵実紀』などの兵学書も残している。これらの兵法が清末に注目されるようになり、まず太平天国の乱の鎮圧に当たった曾国藩がこれをもとに自らの軍を整備する。さらにしばらくして中国に対する日本の侵略がなされるようになると、倭寇を討伐した経歴を持つ戚継光の業績を称える風潮が起るようになった。日本でも、兵学にも一家

言あった江戸時代の儒者・荻生徂徠が『紀效新書』を高く評価した。

『紀效新書』本文十八巻の一つである「拳経」は宗太祖三十二勢長拳と呼ばれる武術を図版で解説している。太極拳には同じ技法（単鞭など）が見られる。また、威継光は倭寇との戦いで得た日本の陰流剣術の目録を研究し『辛酉刀法』を著している。

張藝謀監督の『グレートウォール』（17年）の戦闘シーンは、あまりに漫画的だった（『シネマルーム40』52頁参照）だけに、本作の戦闘シーンと格闘シーンの真面目さと充実ぶりに大満足！

■□■倭寇には前期倭寇と後期倭寇が！本作の倭寇は？■□■

豊臣秀吉が韓国でも中国でも嫌われているのは、文祿の役（1592年～93年）と慶長の役（1597年～98年）を起し、朝鮮と明国の征服を狙ったからだ。しかし、それはあくまで結果論。保護主義が持論のトランプ大統領と異なり、自由貿易論者であった豊臣秀吉は明国との自由な貿易を望んでいたのだから、明国はもう少し協調的に豊臣秀吉と接してもよかったのでは・・・？

もっとも、その時代に行きつくまでには、13～14世紀の前期倭寇と、15世紀後半から16世紀の後期倭寇についてのお勉強が不可欠だ。前期倭寇のキーワードは“日明勘合貿易”。そして、後期倭寇のキーワードは“明の海禁政策”。そして、倭寇消滅のキーワードは、豊臣秀吉による“海賊停止令”だから、そのお勉強もしっかりと。

なお、ウィキペディアによれば、前期倭寇と後期倭寇の概要は次のとおりだ。

倭寇の歴史は大きく見た時に前期倭寇（14世紀前後）と、過渡期を経た後期倭寇（16世紀）の二つに分けられる。

前期倭寇は主に瀬戸内海・北九州を本拠とした日本人で一部が高麗人であり、主として朝鮮沿岸を活動の舞台として中国沿岸にも及んだが、李氏朝鮮の対馬を中心とする統制貿易、日明勘合貿易の発展とともに消滅した。高麗王朝の滅亡を早めた一因ともいわれる。

後期倭寇は明の海禁政策による懲罰を避けるためマラッカ、シャム、パタニなどに移住した中国人（浙江省、福建省出身者）が多数派で一部に日本人（対馬、壱岐、松浦、五島、薩摩など九州沿岸の出身者）をはじめポルトガル人など諸民族を含んでいたと推測されているが、複数の学説がある。主として東シナ海、南洋方面を活動舞台にしていたが、明の海防の強化と、日本国内を統一した豊臣秀吉の海賊停止令で姿を消した。

しかして、本作に見る倭寇の大將の正体は松浦藩の武士で、彼を師匠とした若君やその部下たちと共に浪人たちを率いていた。彼らの目的は松浦藩への武器購入の足掛かりとして明の財と知を奪うことで、そのために倭寇の名を騙っていたらしい。なるほど、なるほど・・・。

■□■こんなエンタメ大作がなぜ非公開に？■□■

シネ・リーブル梅田で客席がいっぱいになるのは珍しいが、私が本作を観た時はほぼ満席。『暗殺』（15年）（『シネマルーム38』176頁参照）も、3月15日に観た『朴烈 植民地からのアナキスト』（17年）も面白い映画だったが、“この手の反日韓国映画”は韓国人俳優が日本人（政治家・高官）を演じているので、その日本語に違和感が強いのが欠点。しかし、本作は倉田保昭のしっかりした役柄と演技はもちろん、女と酒にうつつをぬかしつつ、戦闘シーンではしっかりしたチャンバラ劇を見せてくれる日本人浪人たちの演技もしっかりしている。そのため、見ていて気持ちがいいし、まさに日・中・香港の合作感がある。

また、本作ラストにおけるチウ・マンチェクと倉田保昭との「直接対決」は見応え十分であるうえ、倭寇の大將が策略の限りを尽くしながら結局、戚継光に敗れる原因となった若殿（バカ殿？）を責めずに日本に逃がせるストーリーも日本的かつ武土的で趣がいっぱい。ちなみに、この若殿を演じている日本人のイケメン俳優は誰・・・？

それを含めて、なぜこんなエンタメ大作が日本で公開されなかったのか、私には不思議だ。しかし、くり返せば「未体験ゾーンの映画たち2018」でこんな貴重な本作を鑑賞できたことに感謝！

2018（平成30）年3月26日記